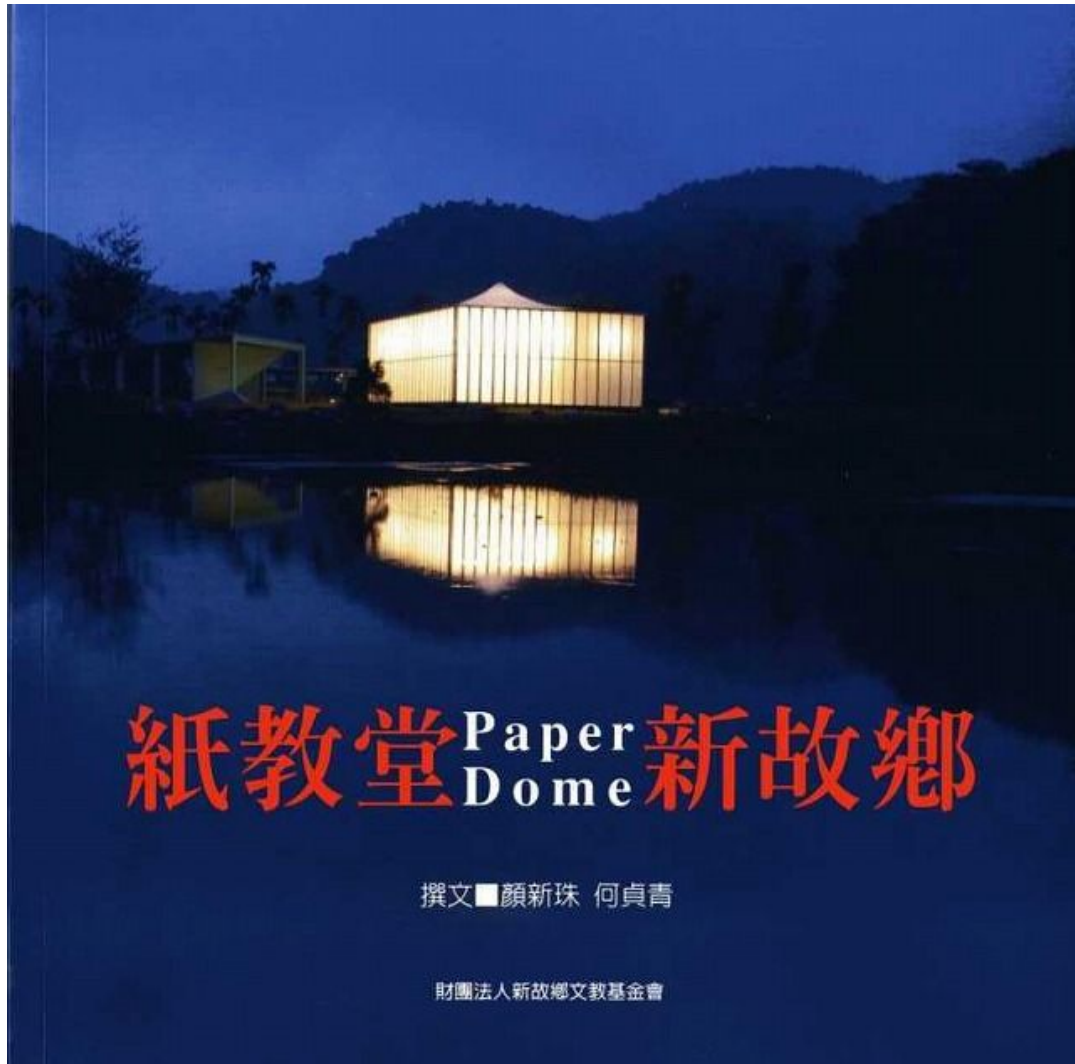




Paper Dome Letter

台湾・神戸まちづくり交流報 特別号1 2009/1/10 発行



たかとりペーパードーム台湾再生プロジェクトの話が持ち上がってから3年8ヶ月、ペーパードームは2008年9月21日台湾埔里桃米村に立派に再生しました。そして完成を記念して出版されたのが「紙教堂 PaperDome 新故郷」です。阪神・淡路大震災からペーパードームが台湾で再生されるまでのさまざまな物語が語られています。原本の中国語を翻訳したものを順次掲載します。(翻訳・垂水英司)

—写真多数掲載の原本(中国語)は1,000円で販売します。
問合せはTCC又は野田北部まちづくり協議会へ—

《序》天から力を授かって 廖嘉展（新故郷文教基金会董事長）

「廖嘉展は「天から力を授かって」、ペーパードームを台湾に移築した。」921 震災重建基金会謝志誠執行長が、2007 年 1 月 25 日ペーパードーム千人立柱式典の挨拶でこう述べたとき、私の胸中には万感が去来した。3 年余の努力の結果、921 地震の 9 周年にペーパードーム新故郷見学ゾーンはついに完成したのだ。

2005 年 1 月、阪神地震 10 周年行事に参加、野田北部のたかとり教会を訪問した時、資金もなく見通しもない状況であった。ペーパードームがかもし出す気配に感動し、湯気の出る手作りのご馳走や暖かな人情にふれ、晩冬の冷気も吹き飛んだ。たそがれの光線の下での 58 本の紙管、その中で交流する人々、まるで母親の暖かい懐に抱かれるようであった。

話を交わすうち、この建物が 10 年を経て状況に合わなくなってきたため、別の所に移転し、教会を現地に再建しようとしていることがわかってきた。台湾代表団の団長として挨拶に立った私は、次第に気持ちが高ぶってき、充分な思索を経ないまま、「このペーパードームを台湾へ移築し、台湾と日本の震災復興まちづくり経験交流の場にしたい」と表明してしまったのだ。

ことは突然だったため、その場にいた台湾や日本の友人たちは驚いて、私のところに確かめにやってきた。「廖さん、本気なんですか？」

その時、私は「もちろん本気ですよ」と落ち着き払っていった。3 日後日本を離れるに際し、長く阪神大震災と 921 大震災の復興まちづくりの交流を進めてきた垂水英司さんが、「たかとり教会、坂茂氏や野田北部まちづくり協議会と話し合っ、ペーパードームを台湾へ送ることに同意します。そして日本側が解体と船賃を負担しますので、台湾は再建と関連費用を負担してください」と私に伝えてくれた。

今にして思えば、まことに冷や汗物だった。ペーパードームの再生は、単なる再建から新故郷見学ゾーンという規模へ発展し、総計 2,300 万近くの工事設備費となり、起工の際まだ資金の目途はなく、建築許可を取ったときやと 390 万を借り入れ工事にかかったのである。

まさに冒険とっていい。このことを知った日本の友人は「日本人ならそんなこと絶対にしないですよ」と驚いた。台湾の友人の中でも私が狂ったと思ったほどだ。加えて建設の時期は、立法委員や総統選挙、世界的な通貨危機と重なり、「募金は至難」であった。

しかし、困難を目の前にして一切出来ないと、何も始めなかったら、あのペーパードームの再生計画は、死産に終わり、現在の状況



を迎えられなかったであろう。2007年9月、921地震重建基金会から600万円の補助金が入ったことで、最も困難な資金不足状況を脱し、ペーパードーム再生計画も実現可能な段階へと入った。

私に止めるよう勧めてくれた友人もいた。後の資金状況もわからず、将来の運営のあても不確定な中、幾度も眠れない夜を過ごした。こうした時、私は天に向かって祈った。「主よ、これはあなたが指し示した路ならば、ペーパードームの再建の完成のため我に力を与え、人々にあなたの愛を示し給え」私は歌った。「慈光をもって我を暗黒から解き放ち、前へと導き給え・・・」私は主が私の傍にいますことを信じ、涙をたたえ、そして安眠するのであった。

思想と行動を結合し、台湾社会の良き発展の道を求めて新故郷文教基金会は活動している。台湾は1987年戒厳令解除のあと、社会のエネルギーは放出し、台湾に民主的活力が満ち、各種の社会運動、街頭運動が盛んに発展した。

こうした反省や主張の中には、弱者への関わりや環境生態の課題があるが、これは結局住民生活の場で検証しなければならない。過去の経験に照らしても、人々の自覚や反省がなければ、さらに自覚や反省に基づいた行動がなければ、結局政策が実現され、街頭運動が実践されることは困難といわざるをえない。

だから、学習、体験を通し、自己の発見と実践を通し、社区の資源の確認と活用を通し、自発的な行動を生活の場から芽生えさせ、社区の人々が自分たちの生きる場のために貢献したいと願うこと、これが新故郷の社区活動に携わる基本的考え方になった。

台湾は「新港」の経験、「美濃」の経験などなどがあり、こうした経験の中でNGO非政府組織の力量が育ち出した。もし台湾の各地でこうした組織が生まれ、長期に活動し、台湾の基礎的コミュニティを変えていけば、それは台湾を変革する機会になるだろう。

ポスト復興時代に入り、地震の影響と決別しようとするとき、被災地の社区は自分自身の復興の道筋を歩んでいけるだろうか。これまで9年来各方面からの支援や自己成長によって、社区は外部との交流する機会や条件があり、こうした過程を経て社区の社会資本が発展し、持続可能な発展へと向かってきた。

新故郷は2005年社区見学センターを設立し、2007年試運転を開始したが、「社区見学連携システム」を構築し、社区同盟によって相互支援組織（資金、マンパワーを含む）を形成することで、被災社区再建の成果を目に見えるようにし、台湾の重要な社会運動の経験にしたいと考えている。さらにNGOの独自産業を発展させ、社会企業へと前進させたい。

ペーパードーム新故郷見学ゾーン、まさしくその理想の発電機となる。企画展示、上演、販売を結合させて社区のテーマや産品を売り出し、ここで上演する芸術家には自己の才能を披露するとともに、他人に喜びを与えるのだ。

私たちがなぜペーパードームの再建にこだわるのか、その一つは得がたい空間ということもあるが、何よりも日本の被災地との交流のよしみと誠意があるからだ。こんなに一途に取り組めたのは、天主の思召して「天から力を授かった」、あるいは「天主から力を授か

った」というべきか。

力、それは喜悦のころから芽生える。ペーパードーム新故郷見学ゾーンが正に開園しようとするとき、台湾の最も困難な改革である根っこからの社区营造、この道ははるかに遠いことを私たちは知っている。だからこそ、喜悦の心無くして、いかにして前進できるのかと思うのである。

ペーパードーム新故郷見学ゾーンのため頂いた恩恵、皆様の献金は、本当に私たちが愛しむこの地にエネルギーを与え、有形の殻を打ち破り、無形の意思、信任と愛を私たちに残してくれました。

さあ、これからもともに頑張りましょう。

本文

純粋で、暖かく、交流の喜びを分かち合う地、それはとこしえの価値を生み出し、人々に勇気を与え、不確定な未来に立ち向かわせる。

ペーパードーム、その空間の特質は遊牧者となって、阪神大地震から台湾 921 地震へと渡り来て、無名の力を伝え、羽ばたく夢を乗せ、人々に前進する勇気を与える。

ペーパードームを台湾へ移築するのが天主の思し召しならば、その意思が実現したのをご覧になって、さぞかし……。

1 1 7 希望の灯

2005 年 1 月 17 日明け方 5 時、神戸市役所 1 号館横の東遊園地、糸のような小雨が摂氏 6 度の大気に舞い、身を切られるようだ。

ここは「阪神大震災 10 周年記念式典」の現場である。入り口の上り段には雪かきで作った地蔵が並んでいる。手にはろうそくを捧げ、その光は菩薩の顔を通し、黄色く透けた顔面には、慈悲、喜び、感傷……があふれる。ボランティアが作る菩薩は毎年ここで特別の日のため護持するのだ。

時間は凍りつくことはなく、人々は次第に広場を埋め尽くし、微かに空が白む中、人々は音もなく、記憶を共にする時刻が到来するのを待っている。

あの 10 年前悲しみの瞬間一朝 5 時 46 分が 1 分 1 秒と近づいてくる。雨がまだ糸のように降る中、その場の人たちは大地震で命を失った 6,200 余名の方々に黙祷を捧げ、哀悼の気は静粛な場に満ち、生者の死者に対する最大の敬意が示された。

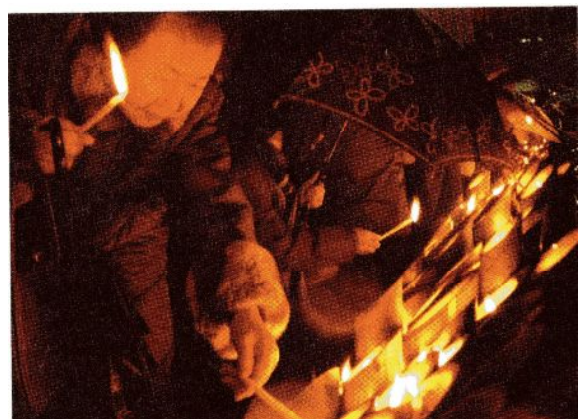
つづいて、人々は各々「117」の形状に並べられた竹筒の中へろうそくを浮かべていく。厳かな雰囲気の中、来賓の挨拶や激烈なアピールもなく、心中で祈るだが、それは震災犠牲者に対するこの上もない祈念式典だ。

東遊園地のもう一方側には、2000 年 1 月 17 日序幕した「追悼復興記念碑」があり、中央にある池の水面には花びらが漂っている。縁の地下道を降りていくと、大理石の壁面一杯に犠牲者の名が刻まれ、一つ又一つと花束が供えられている。

記念碑の一方には、「1.17 希望の灯り」がある。阪神・淡路大震災 5 周年に点火され、この街がかつてこうむった苦難と、瓦礫の中から新生した力量を、大理石の台座に刻んで人々に伝えている。

地震が奪ったもの

命 仕事 団欒 街並み 思い出



・・・たった1秒先が予知できない人間の限界・・・

震災が残してくれたもの
やさしさ 思いやり 絆 仲間
この灯りは、
奪われた
すべてのいのちと
生き残った
わたしたちの思いを
むすびつなぐ

この希望の灯りは、たとえ小さな蛍火であっても、希望を捨ててはならないことを人々に告げるかのように、季節や月日を問わず小さな火種を燃やし続けている。

「決して忘れることのできない、10年前の1月17日あの日記憶を次の世代に伝えなければならぬ」と、真野地区「三星ベルト」の点燈儀式に出席した矢田神戸市長は述べた。

震災後既に10年が過ぎ去ったけれども、これからも地震が記した烙印や記憶は都市の未来へ向け共に歩み続けていく。

神戸は壊れたか？

神戸は日本の本州に位置し、異国情緒にあふれた、流行の先端をゆく都市である。

1639年、徳川幕府が鎖国政策をとり、キリスト教を禁止し、キリスト教を伝道しないと誓ったオランダ人や本来キリスト教を信じない中国人を除いて、長崎港で通商貿易を行う以外は、外国人は一切日本領土に入ることは禁止された。

アジアの市場利益を争って、1853年アメリカの東インド艦隊総司令官ペリーは4艘の軍艦を率いて、武力で威嚇し日本に開国を迫った。翌年、日米は神奈川条約（日米和親条約）に調印、アメリカに対し、下田、箱館両港を開放し、215年にわたる鎖国政策も終わりを告げた。

1868年、日本天皇睦仁が即位、年号を明治と改め、富国強兵を目標に新政が始まった。この年、安政条約に基づいて、神戸は開港を迫られ、横浜と共に19世紀の対外的な玄関口となった。

次々と中国や朝鮮からの移民がこの地に根をはると共に、商業・事業に携わる多くの欧米人が六甲山を背に瀬戸内に面する美しい港都に居を定めた。1975年、ベトナム戦争が終結、北ベトナムがアメリカが支持する南ベトナムに勝利、南ベトナムの人は新政権の迫害を避け、難民の波が続くことになった。海を漂って日本に来たベトナムの難民は、神戸に第二の故郷とするものも多かった。

北野や旧居留地、まるでヨーロッパにいるかのようだ。153万の人口のうち、4万5000

人が世界 115 の国から来た人たちで、33 人中 1 人は外国籍である。この「国際都市」はその開放性と包容力で外部から多くの新成員を迎え入れてきた。

旧居留地の洋式建築には、第 2 次大戦で受けた機銃掃射の跡があるが、多くのブランド店が進出している。新鮮で美味しいステーキと酒、どんなに多くの美食家を虜にしてきたことか。三宮、元町の賑やかな通り、和菓子の香りが発散する。千年の歴史を持つ有馬温泉では、水の記憶は時代を越えて、。。。。。

1995 年マグニチュード 7.2 の大地震が襲った。かつて 6 大都市に列した神戸も、驚愕し度を失い、悲しみの声に満ちた。

震源の深さは 14 キロ、「都市直下型」の阪神・淡路大震災、わずか 20 秒の強烈な震動で、一瞬にして神戸市を瓦礫に変え、生き別れ死に別れを生んだ。神戸港の 22 の埠頭を捻じ曲げ陥没させ、新幹線を玩具のように壊し、世界で最も頑丈といわれた阪神高速道路も、500 メートルの高架橋が瞬間に断裂し長蛇のように地上に横たわり、揺れて落下しそうになったバスが頭上に掛かった。そして買物天国の三宮や元町も 3 分の 1 の商店が瓦礫と化した。

かつて風水害の脅威を経験した神戸市民も、こんな震災の試練にあうとは思ってもよらなかった。神戸市の協同病院、朝日病院は長田区でわずかに残った救急医療機関として、大量のけが人が次々と運び込まれた。病院のホールは臨時の遺体置場となり、医師たちは患者の名前さえ聞く時間もないまま、死に物狂いで救急に没頭した。

神戸市では 4,571 名の死者のうち、60 歳以上が 58% である。彼らの多くが古い木造長屋に暮らし、年金や生活保護を頼りに生活し、日常生活の行動力も弱い人たちであった。

今回の地震では 67,421 棟の住宅が全壊、うち 6,965 棟は大火に呑まれた。廃墟の中、黒煙空を覆い、まるで戦火を受けたように、神戸は突如巨大な廃棄物置場と化し、22 万を越す市民は、599 箇所の避難所に移った。震災の直接損失は 9 兆 6000 億円、当地の 1 年間の国民生産額に相当し、阪神地震は戦後日本で生命、財産の損失が最も大きい自然災害になったのである。

「

(詩文・省略)

」

神戸出身の詩人安水稔和は、地震後の心境と故郷再建の決意を筆で書き記している。

災情惨憺たる長田

戦後神戸は貿易、造船、鉄鋼、機械等の工業を主力に発展し、次第に日本で指折りの重工業都市になった。工業発展を支えるため農村からの労働力だけでなく、沖縄、奄美大島さらに台湾、韓国などアジア諸国の労働力を求めた。欧米、中国、インド人は主に中央区に居住するのに対し、韓国人などはこれ以外に長田区を中心とした西部市街地に居住した。

およそ 1970 年代頃から、長田区は沖縄、奄美、ベトナム難民や日系ブラジル人、南米や

東南アジアなど各国人が居住し、多元的文化に富んだ地となった。阪神大震災前の長田区は、人口 13 万中、28 カ国、1 万名以上の外国人がこの地に生活していた。

神戸市は伝統（近代）工業以外に、江戸時代からの酒造、製靴、製服や観光業も盛んである。製靴関連業者は長田区に集中しており、昭和の初期には、多くの低賃金の朝鮮人労働者や地元労働者の努力もあって、製靴業は世界的な地位を確保し、製靴工場、商店や住宅が一体的に混在する様子が、長田の町特有の姿となった。

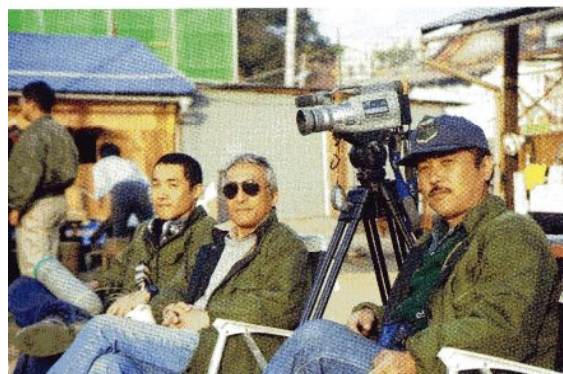
この地では、戦後（前）建った木造の長屋、加えて工場の中には多くの可燃物が置かれ、さらに消防システムが地震で壊れるなど、長田の惨情は最も厳しく、全、半壊は 57.2%に達した。又、製靴業者は全壊 70%、半壊 20%、損失金額は 3000 億日本円に達した。長田区には多くの韓国籍や、遅れて労働市場に入った南ベトナム籍などの外国籍労働者が、復興を複雑なものにしたが、一方で関心を持ったボランティア、建築士、大学教授、教会など各種の専門チームの参画を促した。

野田北部は長田区の西端、JR 鷹取駅と国道 2 号線の間であり、面積 13 ヘクタール、約 900 戸、2,000 人の町で、震災前は二次大戦前に建てられた木造長屋、5 人に 1 人が高齢者が住む、人情豊かな古いコミュニティである。

阪神大震災は野田北部地区に未曾有の被害をもたらした。家屋の全壊は 70.4%、41 名が亡くなり、多くの人が親友を失い、家や仕事を失った。悲しみに打ちひしがれている時、野田北部地区は直ちに災害対策本部を立ち上げ、浅山三郎を本部長に推挙した。

1941 年名古屋生れのドキュメンタリー作家青池憲司は、野田北部の古い友人たちが気に掛かって、地震の 10 日後東京から大阪へ、さらに大阪から船に乗り換えて神戸港に到着、上陸後一路歩いて野田北部に駆けつけた。着いたときは既に深夜だったが、旧知の鷹取教会神田神父の世話で、教会に落ち着き眠りに着いた。

明るく朝目覚めた青池憲司は、はじめて教会辺りが既に焦土と化したことを知ったのだ。それは 50 年前米軍の空襲によって廃墟と化した街を彷彿とさせるものだった。彼は瓦礫となった住まいを片付ける人々、寄る辺のない未来への不安や、親友を失った人々の悲しみを目の当たりにし、元々は旧友を訪ねてきたのだったが、この状況を記録しなければならぬと直感したのであった。



手元に撮影機を持っていなかったため、彼は西端で幸い難を逃れた家を見つけ、門をたたいて尋ね、やっと 1 台のビデオカメラを借り受けた。4 年 3 ヶ月の長い復興記録、それは家庭用の小型撮影機から始まったのである。

レンズを通し、青池監督は住民たちが災害の原点から復興完成に至る過程を完全に記録し、長編記録「野田北部 鷹取の人びと」全 14 巻を作り上げた。廃墟の中に、旺盛な生命力を見た彼は、「人はまるで灰燼の中のダイヤモンドのように、燦爛とした光を放つ」という。

ガレキに花を

最初に「ガレキ婆あ」天川佳美に会ったとき、彼女の歳から言って「婆あ」というのはおかしいと訝しがった。短髪、有能、明るい笑い声、人々に与える印象は伝統的日本女性とはとても距離がある。

市民まちづくり支援ネットワーク事務局の任にあったガレキ婆あは、地震の3年前に、野田北部でまちづくり活動を始めたとき、現「人と防災未来センター」高級研究員小林郁雄と共に、コンサルタントとして参加した。そして地震後1ヶ月の間、彼女は毎日家や事務所を行き来して、休みなく連絡活動に専念した。

震災後2ヶ月目の3月末、彼女の事務所のある灘区南丘町付近、倒壊した家屋を撤去した後、突然現れた空地の中にぽつんと残された盆栽が、まるで留守を守り、主人の帰りを待つかのように置かれていた。「ゆっくりと長い復興の道のり、私に何が出来るのか？」彼女はある時罹災者の家族が来て空地に花束を供えるのを見て、「花束よりも、そこが直接花園なら、もっと元気が出るだろう」寒い冬が去り、春が来る頃、天川佳美にアイデアが浮かんだ。……阪神地区の草木再生計画、その第1弾が「ガレキに花を」であった。

「花咲き爺さん、花咲き婆さん」活動で奔走し始めたとき、内心気が気でなかったと天川佳美は回想する。「そこは悲しみの土地だ、家族が戻って、土を掘って種を播くだろうか？」

幸い野田北部まちづくり協議会浅山会長の協力と呼びかけによって、その年5月28日、地区の住民、大多数が親戚友人を失った人、鷹取教会でミサを終えたばかりの韓国、フィリピン、ベトナム籍のカトリック教徒、共に基礎が残る荒れ地に、

ブレーカーを使って地面を掘り、シャベルで硬い土をならし、痩せた土地に注意深く、希望と活力を象徴する向日葵と長田区を代表するサルビアの種を播いた。「涙を流すより、がらんとした空き地に花を咲かすほうが良い」

「（略）」

「（略）」鷹取教会に掲げられた二つの書には、このような詩文が書かれている。

地震前から陶器を集めるのが好きだった天川佳美、地震で大切な蒐集品が壊れたけれど、人生への新しい見方も気づかせてくれた。「もう具体的な事物にこだわったり、執着したりしない」

ガレキに花の活動は、地震後7年続けられ、10数箇所地区の住宅跡に種が播かれただけでなく、山手線電車線路の両側などにも花が咲いている。阪神地震によって寂しくさまよう心に希望の花びらを届けたのだ。

